

~Column~ 「スーパーグローバル」な北大生

TransJapan 編集部

■グローバルな北大生

北大生は1世紀以上前からグローバルです。クラーク博士や外国人教員4名は、講義を英語で行っていました。洋食カレーライスは北大元祖と言われます¹。クラーク博士の影響で洗礼を受けた北大生は、日本のプロテスタント発祥の「札幌バンド」と呼ばれました。そこから内村鑑三や新渡戸稲造ら、近代日本を代表する国際人が巣立っています。

今も本州から海を渡って北大に進学する学生がいますが、彼らはそれだけでも「海外」雄飛です。実際、JICAの海外青年協力隊には北大出身者が多いとか。また、旧帝大に相応しく、2015年時点で世界150以上の一流校と協定を結び、今も協定数を急拡大しています。

■ローカルな北大生

他方、最近の北大生は「ambitious」じゃないと嘆く先輩もいます。首都圏・関西圏と異なり、交換留学にまだ空席が多いからです。札幌が居心地良すぎるせいかもしれません²。また、また、地方の若者の地元志向が強まり、北大でも道内出身者が増えているようです。

■北大生の「スーパーグローバル」化?

北大では最近、急速に国際化が進んでいます。新渡戸カレッジ、大学院・新渡戸スクール、英語講義(Summer Institute, Learning Satellite)、国際学部(現代日本学プログラム、Integrated Science Program)、国際大学院(国際食資源学院、医理工学院、国際感染症学院)、ダブル・ディグリー等。背景には2014年から10年計画の「スーパーグローバル大学」や「Hokkaidoユニバーサルキャンパス・イニシアチブ」があるようです。

文部科学省は26日、世界レベルの教育研究を行う大学を重点的に支援する「スーパーグローバル大学」の37校を発表した。世界の大学ランキングでトップ100位入りを目指す「トップ型」には北大など13校、社会の国際化を先導する「グローバル化牽引型」には東京芸術大学など24校を選んだ。大学の国際競争力向上と、グローバル社会で活躍できる人材育成が狙い。(『北海道新聞』2014年9月27日朝刊)

■北大生は変わるのか?

留学奨学金数、外国人留学生数、英語講義数、TOEFL高スコア保有者数は大幅に増えそうです。海外初体験から単位取得、大学院学位まで、国際的進路の選択肢が広がりそうです。ただ、英語は道具、留学は手段、グローバル化は結果に過ぎず、それ自体が目的ではありません。英語・留学を活用して何をやりたいかは自分で見つける必要があります。TransJapanが伝えたいことは、学生自身による試行錯誤と発見・感動・成長のドラマです。

1 「札幌農学校・札幌女学校等はパン、洋食をもって常食と定め、東京より札幌移転の時も男女学生分小麦粉七万三千斤を用意し米はライスカレーの外には用いるを禁じた位である」『恵迪寮史』(1933年)が論拠です。が、北大生・卒業生以外では、海軍元祖説も信じられています。

2 日本経済新聞社と日経HRによると、卒業生の大学満足度が全国1位でした(『日本経済新聞』2012年11月5日)。「立地がよい」(56%)、「教育研究内容が優れている」(44%)、「授業料が安い」(31%)が理由です。ただ、北大回答者数が48名のみだったことは伏せておきましょう。